

8月29日となった。大連に来て6日目の朝である。今日は、鳳凰山登山である。

鳳凰山は、丹東市内から北に約60kmいったところにある山だ。丹東駅で合流する中国人の友人が、景色は素晴らしいし是非行ってみようと言うので山登りもいいなと思ってOKしたのである。高さも836mというから高尾山より少し高い山で手頃な山と、その時は思った。その鳳凰山であるが、友人が東北四大名山の一つであると教えてくれた。帰国した後ネットで調べると残る三山は次の通り。

①長白山2,691m(吉林省)、②千山708m(遼寧省・鞍山市)、③<sup>いふりよ</sup>巫闔山866m(遼寧省・錦州市)

このうち長白山は、大連で仕事をしていた時、社員旅行で頂上近くまでバスで行き10分くらい歩いたところにある、北朝鮮との国境になっている有名な火口湖で風景を楽しんだ。あとの二山はまだで今年(2017年)は千山を登ろうと思っている。

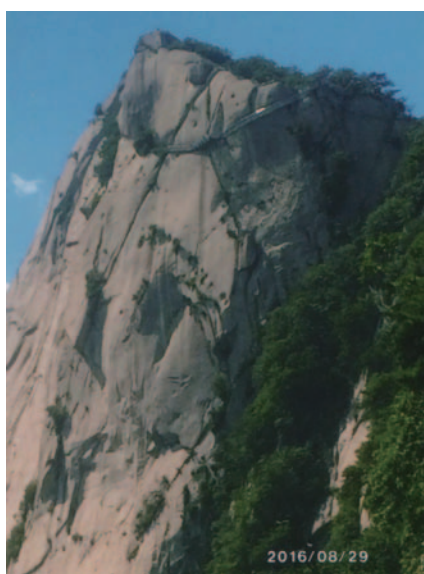
鳳凰山山頂まで29日のうちに登るので朝早くホテルを出て大連北駅に向かった。大連から丹東に行く交通手段は、ひと昔前までは高速道路は整備されていたので高速バスで4時間あまりかけて行っていた。私も2回利用したがさすがに疲れた。しかし数年前にいわゆる「和階号」という新幹線車両が走るようになっていた。ただハルピン行きは、「高鉄」といって300km超で走るが、丹東の路線は「動車」といって時速は200kmを超えない。

大連北駅に着き、窓口でパスポートを見せて6時54分の動車の切符を購入した。料金は108.5円で例によって端数がついている。券面を見るとD7741-4号車8Dとなっている。頭のDは「動」の中国語のピンインDòngから取っている。丹東到着予定時刻は9時35分である。つまり2時間41分の

所要時間である。このD7741号は丹東に着くまでに10駅も停まり、また最高時速も195kmなのでこれだけの時間を要したが、帰りの動車は停車駅も少なく、2時間20分であった。

さて、ほぼ定刻に丹東に着き、改札口で友人と無事合流できた。まず駅から近くにある「長城酒店」に私の荷物を置き、タクシーを探した。するとスッと車が近づいてどこまで行くのかと聞いてきた。日本

でいう白タクである。鳳凰山と友人が言うと150元だという。それならタクシーを探すと友人が言うと100円で交渉が成立した。車はほとんど信号のない道を北にすっ飛ばすように走る。途中8年前にゴルフをした時、ゴルフ場から見えた五龍山が見えてとても懐かしい。五つの険しい頂があるのでこの名がついたと思うが、印象的で美しい山である。現地には約1時間で着いた。100元支払って帰りも依頼したので100元は上客であるのだろ



岩壁の上部にガラスの回廊が設置されている

う。(大連は8元であったがいつのまにか10元になっていた)

鳳凰山の入口は、中国の観光地によくある必要以上の巨大な建造物があたりを睥睨するように建てられている。その建物の一部に入場券売り場があり一人80元支払う。これくらいはするだろうと中に入るとマイクロバスが留まっていて皆それに乗り込んでいく。ここで10元払う。マイクロに乗り5～6分走るとまた立派な門があり、その手前で下車する。ここから歩く人も若干いたが、殆どの観光客はそこに待機していたマイクロに乗り込む。また10元とられる。ようやく到着したところから山を登っていくのかと思ったら、そこからまたロープウエーに乗り換えることになっているのだ。やむなく50元支払ったが最初から150元にすればいいではないかと文

句を言いたくなかった。なにやら騙された気分になる。

ロープウエーは4人乗りで急いで乗るとサッと一気に上昇していく。眺めは確かに素晴らしい。到着したところは少し広がっていて売店がある。お昼頃になっていたのだからカップラーメンを買った。友人が手のひらにたくさんの突起のある軍手が必要だというのでそれも求める。あとでこの軍手が必要である理由が分かった。

登り始める。45度くらいの傾斜の階段が連続する。両側に金属

製の手すりがありそれをしっかり掴みながら一歩一歩登る。たちまち高所恐怖症の私には下界が見られない。足元を見ながら脇見をしないように登るのだ。月曜日だというのに人出の多いのに驚かされる。しかも若い人、子供、年寄り。このような山と分かっていたら来なかったのと言いたいが、老若男女楽しそうに登っているので弱音は吐けない。頂上近くになってガラス栈道(ガラス回廊)と書いた看板の所に来た。悪い予感がしてきた。大連に来る前に、確か8月20日ころ中国・湖南省にある世界遺産の張家界の大峡谷で世界で最も高い(300m)ところにあるガラスの吊り橋(430mの長さ)が完成し、すごい人気だとの写真ニュースを見ていたのである。

栈道の入口でガラス保護の為に靴の上から布製のカバーを履かされた。皆行くので私だけ行かないわけにはいかない。中国大陸は岩山が多いがここも岩また岩だ。おそろおそろ岩山沿いに歩く。何しろ足の下に千尋の谷が緑がかったガラス越しに見えるのである。友人はスタスタと平気で進んでいく。張家界の吊り橋といい、中国人はどうしてこのようなものが好きなのか!と思う。この山に来たことを後悔したがすでに遅い。幅は1.5m程度のガラス道が100m近く続いているのだ。下山道は頂上の向こうという。50mくらい進むと4畳程度の谷に突き出したスペースが作ってある。友人は



急傾斜の岩場を登る人々

早速そこに寝転がり、写真を撮ってくれという。やむなく数枚撮ってあげたがそのあと手すりから身を乗り出すようにして谷底を見始める。その姿を見ているだけで、彼が谷に落ちる様子を想像してこちらの身がすくむ。「蜀の栈道」はこのようなガラスのない栈道かもしれない。この栈道をなんとか通り過ぎたが、また手すりの付いた階段が続く。ツブツブの付いた軍手が活躍してくれる。遠くの景色を見る余裕が少し出てきたので遠くを眺めると、確かに素晴らしい

光景が広がっていた。やはり東北四大名山と言われるだけあるなと思った。しかし二度とこの山に登るつもりはない。

頂上は狭いのですぐ下山することにした。ロープウェイとは別の道をゆっくりと降りて行った。バス乗り場に来たが10元、10元ととられるのも業腹なので二人で結局ふもとまで降りた。途中大きな池や滝、そして孔雀のそばで写真撮影できる休憩所もあって歩いて降りるのもまた楽しかった。高所恐怖症でない方はこの山はお勧めである。

出口には来るとき乗った白タクが待っていてそれに乗り込んで市内に戻った。一言付言すると翌日友人は筋肉痛とやらで、待ち合わせ時間に30分も遅れてきたが、私の足はまったく異常なしであった。なお、私は9月2日に帰国したのであるが、3日のニュースで前述の張家界のガラスの吊り橋が、オープンしてちょうど2週間後の2日に閉鎖されたことが報道された。CNNによると一日あたり8千人と設計されていたそうであるが実際はその10倍に膨れ上がっていたという。橋の入口で入場制限すればよさそうなものと考えるが、そうもいかなかったのかあるいは橋の設計はイスラエルの会社というが構造上の問題が出てきたのかはわからない。今はどうなっているのであろうか。

次号は丹東市内の有名な観光地についてふれたい。

(続く)